

留学先国名 : カナダ

留学先学校名 : マウントアリソン大学

留学期間 : 平成 25 年 5 月 4 日 ~

私は、2013 年の 9 月入学に向けて、その年の 5 月にカナダ・バンクーバーにある語学学校で大学準備期間として新生活をスタートしました。私は中学の頃から、毎年、夏休みの一ヶ月間を利用して、単身バンクーバーでファームステイをしていたため、今回が「親元を離れ、初めての海外…！」というわけではありませんでしたので、特に心配もなく、むしろ、久しぶりのバンクーバー、そして大学生活に向けての第一歩ということで、期待やワクワクの方が大きかったです。ホームステイ先は、白人系カナダ人のホストファザーにインドネシア系カナダ人のホストマザーのおうちでした。この家庭は共働きでしたが、ホストファザーが在宅勤務をしていることが多かったので学校から帰るとよく彼と話していました。二人とも交友関係が広く、友達のベイベーシャワーやバースデーパーティーなどのイベントによく連れて行ってもらったので、今まで知らなかったカナダの文化をいろいろ学ぶことができたことはとても良い体験でした。また、語学学校の UFC プログラム（大学準備のためのプログラム）を通じて、新しい友達や気軽に話せる先生と知り合うことができました。語学学校では、プレゼンの仕方やエッセイの書き方、ディベートの仕方を学び、大学に入るための基礎をしっかりつけることができたと思います。そして、放課後には、友達とショッピングや、ダウンタウンをまわったり、ビーチに行ったり、サイクリングをしたりと、都会と自然が隣り合っているバンクーバーならではの楽しみ方ができました。また、週末にはホストファミリーにご飯に連れて行ってもらったり、地元のカナダ人がよく行くスポットなどに連れて行ってもらったり、ローカルならではの経験もできましたし、友達とバスでシアトルに観光しに行ったりもしました。

そうして、バンクーバーでの充実した日々はあっという間に過ぎ、そして 9 月、日本の大学に通っている同級生に遅れること 5 か月、私は晴れてカナダの大学生となりました。バンクーバーがある西海岸を離れ、移動した先は、大学のある東海岸、ニューブランズウィック州モントクトンからさらに車で 30 分のサックビルという小さな町でした。大学の町と呼ばれるほど学生であふれている町であり、そしてダウンタウンを少し離れるとほとんどが牧場という、典型的なカナダの田舎町でした。昔ファームステイをしていたころの牧場のにおいがし、なんだかとても懐かしく思いました。いくつかある寮の中で、私が入ったのはその中でも大きな寮の一つでしたが、私の部屋が地下の階で人数が少なく、比較的にこぢんまりとしていたため、みんなと仲良くなるのには時間はあまりかかりませんでした。新入生オリエンテーションが終わり、大学の授業が始まると、今までほのぼのとしていた生活が一変し、課題やリーディングなどがいきなり出され、急に忙しくなりました。カナダの大学は州立が多く、基本的に学業水準が高いため卒業するのが難しく、ネイティブのカナダ人でも生半可な覚悟では卒業できないと聞いてはいましたが（特に留学生は入学した 3 分の 1 が卒業できずにやめていくといわれています）、それは想像を超えるものでした。特に英語を母国語としない留学生の私は、新しい環境に慣れていないうちに、大学のことが忙しくなったため、本当に学業と生活のバランスをとるのに時間が

かかりました。私が入学当時、最も苦戦したことの一つは、授業でのディスカッションでした。カナダの大学では、特に文系の科目では、教授の授業を延々と聞いている座学の授業はほとんどなく、一年生の授業でも生徒は積極的に発言することが求められ、それを成績にカウントする教授もいます。先ほど述べたように、ディスカッションの練習は UFC でもしましたが、そのときはディスカッションメンバーも私と同じ留学生、ネイティブの生徒と討論し初めてその違いを思い知らされました。一番の違いとしては、UFC では発言していない人に他のメンバーが話す機会を振っていたのに対し、大学ではそんなに甘くなく、良くも悪くも留学生かネイティブかどうかなんて気にかける人はいないということでした。黙っているとおいていかれるのは当たり前で、簡単にまとめると、発言したものの勝ちという厳しい現実でした。それ以外にも、提出したエッセイが返ってくる度もなくついてくる文法や言い回しの指摘が憂鬱で、そしてそんな細かいミスが足を引っ張ってなかなか良い成績がもらえずにいました。そんなこともあって、入学した当初は「留学生だからといって特別扱いされないこんな環境で私は本当にこれから4年間もやっていけるのか？」なんて少し不安に思っていました。今こうしてあの頃を振り返ってみると、留学生もネイティブも分けへだてなく平等に評価する制度は自分への試練のようなものだったのかなと思いました。というのも、負けず嫌いの私は、最初に留学生は落第する可能性が高いといわれた時点で「私は絶対4年で、しかも必ず良い成績で卒業する」という、(あの頃の自分には少々無謀な) 目標を立て、それに向かって努力したので、今、その努力の結果が報われたという事実が、留学生だからではなく、それだけ努力したからだとということがわかるからです。また、私が当時苦戦したディスカッションでも、自信がなくても、間違っていてもとりあえず思ったことは発言するようになってから、みんながちゃんと私の話を聞き、それに対して賛否を言うようになりました。つまり、私の姿勢が変わるとみんながきちんとそれに対して評価してくれるということです。それは留学生が特別扱いされない環境だからこそ気づくことができたと思っていますし、自分が変わることで結果がついてきたり、留学生としてではなく、一生徒として評価されたことが少しずつ自分の自信に繋がっていったと思います。一年生は、新しい環境に慣れようとしている中、学業でも覚えることやチャレンジしなければいけないことがいっぱいでも本当は大変でしたが、一生に一回の大学一年生としての一年間、転んでは起き上がり、そしてまた転んでは起き上がり、葛藤の中成長することができたからこそ、めったなことでは挫けたり諦めたりしない今の私があると思っています。新しい人との出会い、新しい環境での緊張、不安、挫折等、本当にいろんなことがあり、そして最終的に自分の努力の結果が目に見える形で表れたことが私にとって一番嬉しかったとても充実した一年間でした。